

接背後の力となつて下さつた藤田教授及び静岡
縣史編纂委員、静岡縣史蹟名勝天然記念物調査

委員清水吉彦氏に對して深甚の謝意を表するも
のである。(完)

伊 太 利 と こ ろ ぐ (三五)

瀧 川 規 一

「ヴェニス行」伊太利を歴訪する者にしてヴェ
ニスを見逃がす人はなからう。ヴェニスに訪れ
た人にして名物のゴンドラに乗らなかつた人は
なからう。ゴンドラに興を覺えた人にして聖マ
ルコ寺の廣場に群れ居る鳩の鳴く聲に耳を傾け
ぬ人はなからう。聖マルコの廣場に佇む者は三
方に取り圍む拱廊と寺院の前の時計塔に注意す
るであらう。

サン・マルコの内陣を拜した者は隣接の太公
宮殿(Ducal Palace)内の繪畫を巡覽した後、「歎
きの橋」(Ponte dei Sospiri)を見るであらう。

この歎きの橋は歐洲各地に見出される同形の橋
の原型である。

停車場に着くと、幾艘となく客待ちをしてゐ
るゴンドラ舟の舵手が客の奪ひ合ひをする。異
國人は少からずそれが爲めに迷惑を感ずる。言
語が通じない時に自分の手荷物がどのゴンドラ
に拉し去られたか判らぬ。落着先のホテルが確
定して居らぬ時にはゴンドラを呼び止めんとす
るにも言語が通じない。斯くして驛前のゴンド
ラ船で度膽を抜かれた邦人もある。それをしか
も得意氣にものに書いてゐる人もある。こんな

經驗はヴェニスのごンドラ船に限つたことではない。上海に船が着くと支那人が雲集して客の荷物の奪ひ合ひをなし遂には手荷物を支那人に進上する憂目を見ることがある。大阪では田舎者がタキシに乗らんとて聲をかけると運轉手が客を奪ひ合つて直になぐり合ひをする。京都驛前でタキシを拾ふとすると運轉手同志が喧嘩をしだしたことがある。一の空席が出來ると大學の先生まで弟子の押し賣りをし合ふことがある。これと反對に、昔敎授の令嬢を自認の秀才達が奪ひ合ひをなした時もあつた。ゴンドラ船の舵手が異國人の手荷物を奪ひ合ひをすることは斯く類例を求めると今更驚く可らずだ。

ヴェニスは水の都であると聞きターナ(Torone)の有名なヴェニスの風景畫を見て、どんなに美しい都會であらうかと想像してゐたが、實際に行つて見るとヴェニスは實に汚い町であつたとの印象を語る旅客がかなり多くある。果してヴェニスは汚い都會であるか若くは物の本

に書いてあるやうに美しいロマンチックな都であるかとの疑問は旅客ならでも起る。ヴェニスを汚い町だと云ふ人がどの運河をゴンドラで、また月齡のどんな時刻にゴンドラに乗つたかを考へて見ると大抵は干潮の時に乗つてゐる。而かも停車場から出てゴンドラに行先を命ずると舵手は必ず最捷徑をとる。最も近道であると云はるる經路は大抵都會では裏町でなければ露路である。そんな處を通つてこの都會は汚いと判定するならば誤斷でなければ餘程皮肉な觀察家の評言であらう。皮肉な觀察者なりと云ふ所以は次のやうな事實があるからである。某氏の新築祝に招かれた人が、新築家屋にどれだけ實際に金がかかつてゐるかを判定する爲めに便所に入つた人があつた。また縁談の聞き合せに行つて縁談先の家に素知らぬ顔で態と便所を借りその家の生活現狀を探つた人もあつた。更に友人の家に泊つて客人の枕でなくその家の主人の枕の白布の汚れ工合を見て家婦の行届き不行届きを判ずる試金石とした人もあつた。これ等の人

の觀察には一理はあるが全般を蔽ふことは出来ない。

ヴェニスの裏町を見てヴェニスは汚い都會だと判ずるのと大差がない。潮が干く頃になると泥土の汚いのが露出してどんな海岸の都會でも汚いものである。それを悟らずこんなことなる態々來るではなかつたと後悔する者があればまた話の種だからこれでも來た價值があつたと云ふ人もある。

さてそんならどうしたらヴェニスの美觀を鑑賞出來やう。少し舟賃が高いかも知れないが必ず大運河 (Canal Grande) を通れと命ずるがよい。到着の日は裏通りの運河で我慢してもよいが逗留中には必ずゴンドラを傭つて大運河を溯行し兩岸に立ち並ぶ宮殿と別荘とを見物するがよい。出來得べくんば月明の許にゴンドラを浮べ伊國情緒を歌ふ麗はしき聲に耳を楽しませるがよい。或は舟を沖に出して海から陸を眺めるがよからう。憬がれの水の都に來て居ながら汚

い黒泥の露出を見て印象を態々悪くするにも及ばない。

ヴェニスは海上に建設てられた都であると云はれてゐるが實は百餘の小島の上に餘す處なく一杯に建て詰められ町通りの代りに運河を以てしたのである。然し運河の堤には狭い道がある。この道はカリ (Calli) と呼ばれ橋を以て連絡してゐる。全市の橋の數三百七十八を算し小運河は百四十六を計へる。市の大通りと云ふべきものはカナラッツォ (Canalazzo) と云はるる大運河である。大運河の兩側の家屋は十四世紀から近くは十八世紀に至る種々の様式の建築である。ゴシック型のものルネッサンス型のもの或はそれ以後の時代のものもあるがそれを合計すれば殆ど二百ばかりで何れも大理石を用ひられてゐる。ゴンドラの舵手の説明をきいて初めの程はこれはゴシック型これは何型と興味を以て聞き且つ眺めてゐるが、疲れ果てたる旅の身と建築様式に餘り精通せぬ眼とは建物毎に差異

あることを認めてゐてもまたその裝飾の賑やかさよ好奇の眼をみはつてゐても遂には數の餘りに多きが故に千變一律に只美しい舊めかしいものとしか見えぬやうになる。多くのバラツツオ (Palazzo) に見飽いたうちにも文學的その他の連想によつて記憶に留まるものが多くある。例へばこれはムソリニの別荘だと聞かされると斯る人物の忍び家として必要であらうと首肯する。ダンヌチオが伊國政府から與へられたものだと言明されると成程尤だと思ふ。ラスキン (Ruskin) が其名著「ヴェニス of the stone」中に「大運河の全體に亘つて最もしき宮殿」と折紙つけた家はこれであつてバラツツオ・ロレダン (Palazzo Loredan) と呼ばれる宮殿であると聞くと、餘り目立たぬ家にその美を發見したラスキンの慧眼に今更ながら敬服する。ラスキンが十五世紀のゴシック型の最も高尚なる建物だと云つたと教へられるとさうかな！と同意する。ゴシック型のコンタリニ・ファサン (Contarini-Fasan) と呼

ばる家の前に舟を寄せて舵手が俗にデスデモナ (Desdemona) の宮殿と呼ばれるものはこれであると説明して呉れると沙翁の劇を胸中に描いて無限の興を覺える。一八一八年に詩人バイロン (Byron) が詩ドン・ジャン (Don Juan) を書き始めたのはこの三軒續きのバラツツオ・モチェニコ (Palazzo Mocenigo) の真ん中の家だと指摘されると今更ながら印象を新たにす。或は詩人ブラウニングが一八八九年に生を終へた最後の家であるとしてバラツツオ・レッツォニコ (Palazzo Rezzonico) を指示されると詩人に對する記憶を新たにす。

沙翁の「ヴェニスの商人」中にあるリアルト (Rialto) 即ち當時の商業取引所はこの向ふの教會の前の廣場にあつたと云はれると、舟を暫く棄てて上陸する。リアルト橋の下をゴンドラで過ぐる頃後からまたゴンドラ舟で追かけて来る若き婦人がある。見上げると美しい娘である。と見る間に自分のゴンドラの舷に手をさしのべ

何か口早に伊語を喋べる。英語ならどんなに口早でも判るのだがと思つて考へてゐる間に娘は兩手を頬にあて兩手の目尻を指先で釣り上げてジャボニカと怒鳴る。何のことか判らぬ。舵手は笑つてゐる。ホテルに歸つて聞くとそれはヴェニスの水町の女であつたさうだ。リアルト橋

下は極東人がベカコをされた處だとして後世に名所の一になるや否や。一八一八年頃にマリナ・ベンゾン (Marina Benzon) と云ふ美しい伯爵夫人が居つてバラツツォ・コルネリ・スピネリ (Palazzo Corner Spinelli) でヴェニスの流行界の人々を集めて樂んだ處はこの家であり、こゝには詩人バイロンやモアア (Moore) が訪れたと聞かされると今は主なき家でも内部を窺ひたくなる。カ・ドロ (Ca d'Oro) と云ふは泥の家に非らずして黄金の家である。ゴシック式で建てられたヴェニスでの最美しい家であると云はれる丈けあつて、宛ら洋館の金閣寺である。時代の色がついた黄金色も亦ゆかしいものである。こ

の家の上階の欄干に倚つてベカコをせぬ婦人が居るならばロマンチックであるものと思はれた。樂聖ワグナ (Wagner) が一八一三年に最後の息をひきとつた家はバラツツォ・ヴェンドラミン・カレルヂ (Palazzo Vendramin Calergi) と云ふ館である。

抑も大運河に櫛比するバラツツォを一々宮殿と譯するのは何となく大袈裟のやうな氣がするさりとて只の家と云ふのは物足らない。單に館と云へば或は適當かも知れない。ゴンドラの舵手が拙な英語でぼつり／＼説明するが餘りに數が多いので閉口する。然しながら大運河のバラツツォの屋並びを何等の文學的連想なくして漫然と眺める丈けでも美しい。ヴェニスの美觀は大通りに當る大運河にあると云つても過言であるまい。

サン・マルコ寺院近くにある吾が宿のホテルも亦大運河に面してゐる。河の向ふ側にはチチアン (Tizian) の繪で有名なサンタ・マリア・デラ・

サルユーテ (Santa Maria della Salute) と云ふ寺が見える。遙か向ふの地角の島の上に建てられたサン・デオルデオ・マデオネ (San Giorgio Maggiore) の寺の塔の尖端が見える。この島に渡つてヴェニスを見返へす時には非常に美しく見える。部屋には王侯貴族の身を横へるに相應しい天蓋付きのベッドがある。部屋の戸を押してあけて欄干の處に出ると日光がアドリアチック海の彼處から黄色の輝しい帯を波上にながく惹いて窓下に及んで居る。いつの程か階下の波際に男女の聲がする。男はテナの美聲をふりあげて幾段の波上に響をながす。女はソブラノ聲でこれに和する。舟を一つ買つてやれとボーイがすゝめる。舟には乗り心地よき設備が出来てゐるとの説明をうける。ボーイの口に乗るとも舟に乗る勇氣はない。それでは歌の料をとて僅かばかりを與へる。今度はベカコをしなかつた。聲の柔かさ手の柔かさだけが記憶にのこる。

朝氣色を見るために早く起き出で階下の大運

河に面してゐる露臺に出で、朝食をとる。すゝめられるまゝに波の上にゴンドラを進めて、サン・デオルデオ近くまで行く。静かなる朝和に靄さへ立ち罩める海の上に立ち並ぶヴェニスの都の有様はターナの繪其まゝである。宿に歸へると二人の邦人客が居て口角泡を飛ばして悲憤慷慨的に論じてゐる。耳を峙てると何のことはない。「前晚日本人がゴンドラ舟で豪遊してゐた。あれは國費を濫費してゐるのだ」とて如何にも残念さうである。ゴンドラ情緒を味ふ勇氣を持たぬ腹癒せをやつてゐるのである。僅か邦貨二圓ばかりの金だ。瀬多川に舟を浮べるとせばそれ以上かかる。金銭ではどうにもならぬのは只言語の障礙である。

サン・マルコ寺の前の廣場に佇む。無數の鳩が敷詰めた石の上に降りて居る。時には帽子の上或は肩の上にとまる。脚下ではうつかりすると足で踏み潰しさうである。こんな光景は既に倫敦のセント・ポール寺の前でも見た。羅馬のセン、

ト・ビータ寺の前でも見た。東京は淺草、京都は本願寺で見た。物珍らしくはない筈であるのにこれをこゝで見ると珍らしい感じがする。後にこれを上空から撮影した寫眞を見た。成程物珍しく思つた譯が判つた。廣い方形の廣場に數詰めた敷石の上に櫻花の散り敷くやうに鳩が居るからである。譯なく珍しいと思つたのは直覺的印象が理知の批判よりも以上のものを教へて呉れたのである。

時計塔に上つて見る。既に塔と云ふべき程の高處に上つた經驗から判斷するとこの時計塔は左程に高くない。マルセーユの高塔に上つた。巴里の凱旋門上に登つた。エッフェル塔では上から持合はせの新聞紙を飛ばして見て叱られた。倫敦でも許される處は大抵登つた。何れも高處から見下ろす愉快がある。然し今時計塔の上から寺院參列の僧を見下したことはこれが最初であつて最後である。廣場の向ふから異様の服裝をした僧がながく列をなしてサン・マルコ

の寺に繰り込んで来る。善男善女が行列の後からついて来る。これがまた異様な服裝である。

時計塔から急に降りて自分も亦その翼尾に附して寺院内に入る。内陣では禮拜が行はれてゐる。寺内の小祠では眞心こめて祈つてゐるお婆さんがある。何を祈つてゐるのか。冥福を祈つてゐるのか現世の幸福を祈つてゐるのか。

聖マークの聖骸はアレキサンドリアから八二九年に運ばれて今日この伽藍の高い祭壇下に安置されてゐると云はれてゐる。聖體安置の教會は他の教會よりも暗示する處深く禮拜祈禱の對照物として人間の情的欲求に合適する。偶像崇拜は信仰を具象的になると共に抽象的理論的信仰よりも力を與へることがある。この點佛教と基督教とは撰ぶ處がないやうに思はれる。

玄關上の有名な青銅製の大きな馬を見物すべく上る。この馬はコンスタンタイン (Constantine) が羅馬からコンスタンチノーブルに運び其處から十三世紀にヴェニスに運ばれ一七九七

年にはナポレオンが巴里に運び去つたが一八一五年にヴェニスに返還された、と云ふ箔附きの馬である。堂内のモザイクの大規模なることは只驚くばかりであり四萬五千七百九十平方呎を蔽うてゐると聞いて益驚く。

新著紹介

○石川縣の地誌

齋藤外二著 菊判百六拾頁 昭和七年十二月 金澤市宇都宮書店發行 定價九十五錢

近來地理學界の風潮に乗つて漸く刊行盛となつた地誌の少なからぬ中に斷然自眉の一として光る本書を紹介したい。著者は多年師範學校に於て郷土の地理研究に努力した篤學の士でその集積した材料を巧みに綴られた。地誌編纂の態度にも色々あり、クレプスのオストアルペンの如き高踏的と云ひたいものより多くの案内記的のものや、又餘りにも地人相關の理法と言ふ流行語にまどはされて地誌本來の目的を忘れたものなどあるが、本書は大體に於て中庸を得てゐる讀者は著者に石川縣内を案内されて隨所で地理學的説明を受けるであらう。教授者は安心と自信とを持つて石川縣の地理を語るべく、學者は多くの資料を攝取し得るであらう。若し此種の地誌が全國的に出たならば如何に好都合かと思はれる。例へば某通俗

地理書に能登上布が晒されるのは邑知渴地溝の斷層線の湧泉としてあるが、荷馬車にて能登部より上野に運ばれ、海水が漸く浸る程度の安山岩よりなる岩卓の窪地を利用する約十米四方の岩塊と礫とで區劃された「間」の中に布を延して三日間位浸す」と言ふ記事さへ知れば、上記の誤はしなかつたであらうと思はれる。同様な事はまだ種々あるが省略する。景觀はかなり注意して書いてあり、砂丘地帯や半島等は頗る面白いが、未だ如實に彷彿たらしめるどんな所と言ふ點に多少の遺憾を感じる。例へば七尾灣の奥深い入江の石垣風景などは強調されてもよし、石川・江沼平野から見る白山が越中から見る立山と違ふ氣分のする事なども地誌に書いて悪いことではあるまい。圖は百五十六に達するが縮尺を豫想せぬ原因が多

くの圖に致命傷的結果を與へてゐる。誤植は少いがそれでも大切なものに誤がある。然し難讀の地名に振假名ある事は讀者に頗る便利である。兎も角も城下町・季節の聚落・溪口聚落・砂丘・扇狀地・丘陵・高山・地溝・出稼ぎ・製鹽業其の他種々の地理的興味深き地方に纏つた地誌を獲た事に就いて感謝せねばならない。卷頭には石川縣の地理的トピックスを強調された田中啓衛氏と郷土教育と地誌の結合を述べた檜崎視學官の序文があり、卷尾に文獻と短い統計表が載せてある。その中で明治十二年の人口統計は珍しい。加賀の士族は五二六六〇人となつてゐる。(尾山生)

○歐洲の暴風地帯を往く

アレキサンダー・ボウエル